四旬節第２主日

第１朗読　創世記 15・5-12、17-18
第２朗読　フィリピ３・17～4・1
福音朗読　ルカ 9・28b-36

2025.3.16　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
レデンプトール会　萩原義幸神父

ミサに子どもたちが来てくれていると、いつもまず子どもたちにお話をするようにしています。今日もたくさん子どもたちが来てくれていますので、まずお話ししたいと思います。

教会は今どういう季節を過ごしているでしょうか。神父さんの服の色が紫になっているということは、待降節か四旬節ですね。今は、四旬節という季節をわたしたちは過ごしています。

さて、この四旬節、一体何をするときなのでしょうか。

まず一つ目は、神様の愛をわたしたちは思い起こすときです。神様がわたしたちをいつも大切にしてくださっています。復活祭までの間に、そのことをまずは皆さんと一緒にこのミサの中で、そして教会学校のリーダーたちそしてこの教会の人たちと共に考えていってほしいと思います。神様はどんな時にわたしたちを大切にしてくれているだろうか、と。

そして、大切にしてくださっている神様を思うときに、ふと、わたしたちはその神様に本当に喜ばれているだろうかということを考えます。そして、「ごめんなさいをしなければいけないことがないだろうか」ということを、それもこの四旬節の季節に考えて欲しいと思います。けんかしちゃったとか、お父さんお母さんをちょっと悲しませちゃったとか、そういう時は「ごめんなさい」をする季節でもあります。直接「ごめんなさい」って言えたらいいですよね。でもそれがちょっと難しいと思うときは、神父様のところに行ってゆるしの秘跡を受けることもできます。神様はいつもわたしたちを温かくゆるしてくださるからです。

さて、この四旬節の間、神様のことを思いながらミサに来たり、教会学校のお友だちと一緒にお祈りしたりします。そして特にこの四旬節は、十字架の上にいらっしゃるイエス様を見てお祈りしてほしいと思います。この十字架は、神様が

わたしたちを大切にしているというしるしです。この十字架を見ながら神様の子どもとして大きく成長していくことができますように、このミサの中で一緒にお祈りしていきたいと思います。

それでは、皆さんにお話をしたいと思います。

「これはわたしの愛する子、選ばれた者。これに聞け」（ルカ９・35）。今日、わたしたちは一日かけてご一緒に黙想会の時を過ごしていきたいと思います。テーマは「祈りとゆるし」ということで、わたしたちはこの祈りの中で信仰を育（はぐく）み、そして神様からいつもゆるされている、そのことをご一緒に今日一日かけて黙想していきたいと思います。

今日読まれた福音書は、四旬節第２主日に必ず読まれる主の変容の箇所でした。なぜ四旬節に主の変容の箇所が読まれるのでしょうか。８月に主の変容のお祝い日はあります。それでもあえて四旬節にこの主の変容の聖書の箇所を朗読するように招かれているのです。

それは、この主の変容が、イエス・キリストの受難へと向けられているからです。だからこそ、四旬節にふさわしい朗読と言えるでしょう。イエスがこれから歩んでいく受難への道のりは、弟子たちにとっては信じがたい敗北のように感じたことでしょう。弟子たちは、イエスが王様になって、イスラエルの国を治め、そしてさらに、ローマ帝国の支配下に当時あったので、そこからも解放してくださると信じていたからです。しかし、実際イエスはどうだったかと言いますと、十字架の上で命を捧げていかれます。この現実を弟子たちが受け止め、乗り越えることができるようにと、前もって復活の栄光の姿を弟子たちに見せられたのです。それが今日の主の変容の箇所の出来事でした。

わたしたちも、四旬節の歩みの中で復活の希望を持って復活祭までの間、心を神様に向けてしっかりと信仰を歩んでいくことができるように、ご一緒にこの聖書の箇所を黙想したいと思います。

さて、第一の朗読を見てみますと、ここにアブラハムの信仰が語られていました。神様はアブラハムを祝福で満たされます。土地を与えられること、そして子孫が繁栄すること、それが旧約の世界においては祝福されているしるしだったのです。この祝福は、アブラハムの信仰によって神様からもたらされたものです。

アブラハムの信仰とは一体何だったのでしょうか。それは、主なる神を信じ、どんなことがあっても神様のみ旨を生きようとする姿だったと言えるでしょう。

アブラハムは 75 歳の時に生まれ故郷である土地を離れて、全財産を持って、神様が「ここに行きなさい」と言われた地に向かって旅立ちます。75 歳で今までの生き方を変えるというのはとても難しいことかもしれません。――わたしたちに置き換えて考えてみると、75 歳になって新しく人生を始める……どうでしょうか。――心の中に様々な葛藤があったと思います。新しい土地でうまくやっていけるだろうか。しかし、アブラハムは、主なる神がそこまで言ってくださるなら、と、その言葉に信頼を寄せて旅立っていきます。その旅立ちを決意させたのは、神へのゆるぎない信仰だったと言えるでしょう。

今日、わたしたちもこのアブラハムの信仰の模範に従って、神様に信頼を寄せて日々を歩んでいくことができるように祈りたいと思います。

そして、アブラハムは信仰のゆえにカナンの地が約束されました。わたしたちは主イエス・キリストによって天の国が約束されています。そのことを今日の第二の朗読で使徒パウロはわたしたちに伝えてくれています。十字架によって示された主なる神の愛によって信仰を養っていくように、と。それはわたしたちが将来約束された天の国に迎えられること、そこへと向かっているからだ、と語ります。毎日の生活の中で起こってくる様々な困難を、このイエス・キリストの十字架の苦しみに重ねて、わたしたちもイエス・キリストと共に乗り越えていくことができるように招かれているのです。

さて、今日の福音において、主の変容の箇所、それはわたしたちに何を伝えているのでしょうか。「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」。モーセとエリアと語り終わった後(あと)、イエスだけが弟子たちの前に残されました。弟子たちは、目をあげたときにイエス・キリストだけを見たわけです。つまり、このイエスに従って信仰を歩んでいくようにと神様はわたしたちを招いてくださっています。

この四旬節、わたしたちがイエス・キリストの言葉と行いを思い起こしながら、日々の生活の中で、そのイエスに倣って、出会う人々に神様の愛を伝えていくことができますように、共にこのミサの中で、必要とする恵みを父なる神様にお祈りして、ミサを続けていきたいと思います。